アイヌ語で「広場」の意味

ミンタラ

ポイヤウンペの戦い ③

「金成マツ版　虎杖丸」から　文：瀧口夕美　絵：小笠原小夜

猛毒男、猛毒女あらわる

私、ポイヤウンペの兄、カムイオトプシは、うらないをしながらなみだを流していた。兄ほどの勇者がなぜ泣くんだろう、と不思議に思っていた。その場は、静まり返っていた。しばらくして、カムイオトプシが自分の席にもどり、こう言った。「うらないで、私はおそろしいものを見た。この空のはてにすべての雲がもどる場所がある、そのさらに向こうに『モシレサチサチ』という不毛の地がある。そこに住む猛毒男と猛毒女のきょうだいが、いまこちらにむかっている。ここにいる私たちはみな毒で死ぬ。昔から、毒で死ぬもののたましいは、生まれ変わることができないと言われているので、あわれな気持ちだ。われらのリーダー、ポイヤウンペよ。あなた一人だけでも、最後には助かってほしい。がんばってください」と言った。

ありったけの気力をふりしぼって考えたが、この事態をどう解決したらいいのかわからなかった。私は声を美しくひびかせ、こう言った。「ともに無残に死ぬと言われようとも、私たちの酒でカムイ（神）にいのりをささげよう。そして、飲んで、おどって、良いときをすごそう」。すると、みないっせいに顔を上げた。

うたげがもりあがったころ、海の方から何者かがやってくる音が鳴りひびいた。やがて戸を投げとばして家に入ってきたそいつは、猛毒男だった。小山に手足が生えているように大きい。手足の先まで猛毒のよろいでおおわれている。よろいの表面は岩のようにゴツゴツとトゲが生え、その先からにえたぎった猛毒がふき出している。とても大きい刀もさしている。後ろには猛毒女がいて、よろいにはイガイガとトゲが立ち、猛毒のあわがふき出ている。

刃のついた猛毒の鉄の輪っかも背負っている。そいつらの出す毒のにおいが、強い風のように家じゅうに満ちて、気分が悪くなりそうだ。

猛毒男はニヤニヤしながら家の中を見まわし、海の岩穴の中に潮が流れこむようなボコボコした声でこういった。「なーんだ、男も女も、貧乏人か小間使いばっかりじゃないか！　ポイヤウンペとその仲間が、私たちをみな殺しにするとか言っていると聞いて、妹とやってきたぞ。ほらほら、たとえ殺されても、生き返るほどの自信のある者は、かかってこい！」

育ての兄がいかりにふるえ「何者だおまえは。私の弟が目に入らないのか？」と言い、立ち上がった。そして、「若い仲間たちよ、私が最初に生まれた者だ。こんな悪い神と戦って私が死んだとしても、勇気を出してくれ！」と言って、猛毒男にとびかかっていった。

これまでのお話は「まなぶんデジタル」＝QRコード＝で読めます